

のちのこのカノンは様々な矛盾からシンドラーによる贋作だとみなされるようになった。しかし、彼が着目したように、この楽章全体に管楽器の十六分音符による機械的な規則性が流れていることは事実である。

「滑稽に」を意味する scherzando が付けられた第二楽章は、前述のカノンと同じ動機がまずヴァイオリンによって歌われる。楽章中に 114 回登場するこの主題は、開始の拍をずらしながら現れることで聴く者に拍子感を与えまいといたずらをするかのようだ。

弦楽器の六十四分音符が子供の笑い声のように時折姿を見せるが、最後は蜘蛛の子を散らしたように走り去ってゆく。

第三楽章 - Tempo di Menuetto 四分の三拍子 ヘ長調

7月6日月曜日の夕方、ベートーヴェンは「不滅の恋人」へ二通目の手紙を書いた。

— たったいま、手紙は早朝に出さねばならないことを知ったところです。

月曜と木曜、この日だけ、ここから K へ郵便馬車が出るのです。—

「K」とはテプリッツ近くの温泉地カールスバード (Karlsbad) であることが判明している。

ベートーヴェンが交響曲の原案を記したスケッチ帳「ベッターズ・スケッチブック」には「カールスバートの郵便馬車」という名の譜面が残されている。この御者のポストホルンのモチーフは、トリオに現れるホルンの旋律に姿を変えた。

最愛の恋人のために彼が綴った手紙を運ぶ郵便馬車。ぬかるんだ田舎道をゆく馬車を見つめながら、ベートーヴェンは二本のホルンのように自らの心を「恋人」に寄り添わせたのだらう。

第四楽章 - Allegro vivace 二分の二拍子 ヘ長調

音楽評論家パウル・ベッカーはこの交響曲第 8 番を第 7 番と比較してこう記している。

— 七は、高いところ登攀でしたが、八はやっと登りつめた絶頂での、憩いと晴れやかな幸福です—

川魚の鱗が太陽に照らされて銀色にきらめくように、光を放つ三連符が幸福感とともに滑り出す。第二楽章の主題に似たこの動機は、一見ロンドらしい軽快な主題だが、強拍と弱拍が曖昧である点や強弱が大きく変化する点など独特でもある。

— 私たちの愛こそは、天の殿堂そのものではないだろうか—

主要主題が突如として p に消え去ると、代わって変イ長調の副次主題 [譜例 3] が現れる。やさしく牧歌的なこの旋律は、ベートーヴェンと「恋人」が語り合うかのように弦楽器と木管楽器で歌われる。

再現部、展開部を経てコーダに到達すると幸せが翳りを見せるかのごとく、予想だにしない嬰ヘ短調で主題が再現される。

総休止によっていったん息が整えられると、覚悟を決めたかのようにホルンの三連符の合図で怒涛のクライマックスに突入。名残惜しむかのように和音を繰り返すと、興奮のうちに幕を下ろす。

20 世紀後半にまで持ち越された「不滅の恋人」問題であったが、1970 年代にメイナード・ソロモンによって「恋人＝アントニア・ブレンターノ」説が提唱された。手紙、その他の資料の条件からベートーヴェンの支援者フランツ・ブレンターノの妻である彼女が最有力とされている。

— 永遠にあなたの 永遠に私の 永遠に私たちの —



参考文献

青木やよひ 平凡社 (2007) 「ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究」

岡田豊 論創社 (2007) 「ベートーヴェンああ！この運命」

辻莊一 音楽之友社 (1979) 「最新名曲解説全集第 1 巻交響曲 I」

平野昭 音楽之友社 (2012) 「ベートーヴェン」

(文責：藤田伸哉)